

ミルカはラックの徒弟とていである。主に家政を担当している。

最近はつきは天才錬金術士れんきんじゆつしファイリーの指導の元、学術面で才さいを發揮はつきしつつあった。

そんなある日、料理を作りながらミルカはニアに言う。

「ニア、おれもやっぱり剣ぐらい使えた方がいいんじゃないかな」

ニアは狼おおかみの獣人族じゆうじんぞくで、シアの妹。幼いときから剣術を習っている。

「そうですか？ 別にミルカは頭がいいから剣を使えなくてもいいと思います」

「でも、おれ以外皆強いし」

「ファイリー先生は強くないですけど」

「ファイリー先生は天才だからね」

ファイリーはあのラックすらいちもくお一目置く錬金術の天才なのだ。

「やっぱり剣ぐらいいは使えた方が、何かと便利かなって」

「そうですねー。なら、ミルカも一緒にこの後練習しますか？」

「やった！　お願いな」

そして、家事を終えた二人は屋敷やしきの庭に出る。

「じゃあ、ミルカはこの木剣で素振りすぶからやりましょ

う」

「わかった！」

二人は並んで素振りをする。たまにニアがフォームを
チェックしてくれた。

すぐにミルカは汗だくになって、剣を振れなくなつた。

「も、もう腕が動かないよ」

「じゃあ、休憩きゅうけいしましょう！」

そう言いながらも、ニアはまだ剣を振りつづけている。

「ニアはすごいなあ」

「三歳から振ってますからね。剣を振る筋力がないと他
を鍛きたえても仕方しかたないですから」

「お、今日はミルカも剣の練習しているのか」

やってきたのはラックである。

「そうなんだ。おれも剣を使えた方がいいと思っただけだ」

「まあ、てきど適度な運動はからだ身体にいいからな」

「ロックさん、どうやってたら剣術がうまくなれるかな？」

「ミルカなら、体力つけて、筋肉つけて基本を身につけるところからだな」

「そっかー。早道はないのかー」

それからラックはニアにけいこ稽古をつける。

ミルカから見てニアの動きはすご凄かった。そしてラックの動きはそれ以上に凄い。

二人ともすごくかっこいい。

「よし！ おれもがんばるぞ！」
疲れ切っていたミルカも気合いを入れ直して、再び剣を振り始めた。